

## 『篁物語』「比叡の三昧堂」についての考察

松 野 彩

### 一、問題の所在

『篁物語』は実在の人物・小野篁（802～853年）を主人公とした物語で、成立時期は平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）であると考えられるが、現存する複数の写本の本文には対立する箇所や読解困難な部分があるため、作品の成立時期と同時代の資料をもとに本文・解釈を確定していくことが課題である。

ただし、現存する最も古い写本として、鎌倉時代後期に書写された承空本があるが、その他は、江戸時代初期に書写された書陵部蔵本、彰考館甲本・乙本などまで降ることには注意を要する。

これらの写本を比較対照すると、承空本と書陵部蔵本の間には書承関係があると認められ、ほぼ一致する。一方、彰考館甲本・乙本同士もほぼ一致する。そのため、「承空本／書陵部蔵本」「彰考館甲本／乙本」で本文が対立する箇所が多数存在する<sup>2</sup>。

また、これらの現存する本文では、すべての写本で読解困難な部分や、ある写本では読解可能だが、他の本では読解困難である箇所などもある。

本稿では、これらの問題のうち、前者の本文が対立する箇所、第一部の最終部分、篁が、亡くなった異母妹の法要を行う部分に注目する。

- ・ この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、(A) 法華経を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり (『篁物語』第一部 216頁)<sup>3</sup>

彰考館甲本・乙本では、下線部 A「比叡の三昧堂にて」となっているが、承空本・書陵部蔵本では「比叡の」となっており、不自然な本文となっている<sup>4</sup>。そのため、現代の注釈書はすべて、下線部 A「比叡の三昧堂にて」の本文を採択している。

しかし、ジャパンナレッジで〈新全集〉の本文を検索すると、「比叡の三昧堂」という表現は他にないことから、「比叡の三昧堂」という本文を採択するのには躊躇される<sup>5</sup>。

また、『篁物語新講』<sup>6</sup>では、『源氏物語』「夕顔」巻の「比叡の法華堂」と同じものをさすとしているが（下線部 BC）、この指摘についても確認する必要がある。

- ・ (B) かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめてさるべき物どもこまかに、誦経などせさせたまふ。

(『源氏物語』夕顔 ① 192 頁)

- ・ 彰本を参考にすると、比叡山の三昧堂にて死後七日目ごとに供養をする意となる。また、(C) 『河海抄』夕顔に、夕顔の供養について述べ、「四十九日、比叡の法華堂にて」の註に「篁が日記云……法華経書きて比叡の三昧堂にて七日のわざしけり」とあり、彰本系の本文によったことになる。三昧とは「善心一処住<sub>レ</sub>不動<sub>レ</sub>是為<sub>レ</sub>三昧<sub>レ</sub>」(智度論)で、心を一処にあつめ、善事を行ふ事を意味する。三昧僧は法華経を読誦した僧である。…… (『篁物語新講』62~63 頁)

「比叡の三昧堂」という本文を採択するのであれば、下線部 B の内容を確認した上で、古記録などを調査し、史実にも根拠を求める必要がある。そこで、本稿では、まず、「三昧堂」が「法華堂」と同じものであるのかを確定する。その上で、「比叡の三昧堂にて」という本文が妥当であることの根拠として、『篁物語新講』で『源氏物語』「夕顔」巻の例が根拠とされているが、比叡山の三昧堂で四十九日法要が行われた例が史実にあることを明らかにし、本文の妥当性を補強する。

## 二、「三昧堂」の呼称

『平安時代史事典』<sup>7</sup>では「三昧堂」について、次のように説明されている。

- ・ 三昧堂 (D) 僧が法華三昧・常行三昧など三昧を修するためにこもる堂。常行三昧堂が常行堂と略称されるので、三昧堂といえば法華三昧堂をさすことが多い。天台教団では、最澄が四種三昧院建立を発願したのに始まる。(E) 比叡山では三塔全てに法華・常行の両三昧堂が設けられ、天台系の諸大寺にも造建された。……法華・常行の両三昧は先亡精霊追善供養のために平安中期より勤修されるようになり、墓所に三昧堂が建てられた。

(『平安時代史事典』今堀太逸「三昧堂」)

下線部 D によると、「三昧堂」は「法華三昧堂」をさすことが多いということである。下線部 E で言及されている比叡山の三昧堂について、鎌倉時代中期に記された『叡岳要記』には次のようにある。

- ・ (F) 法華三昧院、〈在<sub>レ</sub>止観院西塚上<sub>レ</sub>、亦名 (G) 半行半座三昧院堂、 (H) 今云<sub>レ</sub>法華堂<sub>レ</sub>。……

(『叡岳要記』上)<sup>8</sup>

この記述は、「常行三昧堂」の直前にあるので、「法華三昧堂」、つまり「三昧堂」のことであると考えられる。そして、「法華三昧院」「半行半座三昧院堂」（下線部 FG）、『叡岳要記』の書かれた時には「法華堂」とも呼ばれていたことがわかる（下線部 H）。

ただし、『民経記』（鎌倉時代後期）に記された康保 3 年 [966] の延暦寺の火災の記述によると、法華堂・三昧堂・常行堂とあり、法華堂と三昧堂は別の建物となっており（下線部 I）、疑問の余地がある。

- ・ 今日亥刻延暦寺講堂・文殊楼・四王院・延命院之本堂・(I) 東法華堂・三昧堂・常行堂・鐘楼及僧房惣卅余宇弘地焼亡、  
(『民経記』 文永元年 [1264] 3 月 29 日条)<sup>9</sup>

しかし、以下の『貞信公記』の記述によると、少なくとも、比叡山 3 塔のうち、東塔の三昧堂については、法華堂と常行堂が並列表記されており（下線部 J）、別に三昧堂が存在することはうかがわれない。

- ・ 写経始、三寺誦経、(J) 東花<sup>10</sup>・常行・法性寺東堂也、各二十、  
(『貞信公記』 延長 3 年 [925] 10 月 8 日条)

したがって、比叡山 3 塔のうちの、どの三昧堂であるかは特定できないものの、下線部 A の「比叡の三昧堂」と、『源氏物語』「夕顔」巻の「比叡の法華堂」は、両者ともに、同じ比叡山にある法華三昧堂をさすと考えてよいだろう。

### 三、比叡山の三昧堂での四十九日法要

本節では、比叡山の三昧堂で、実際に四十九日法要が行われた例が史実にあったかを明らかにする。

東京大学史料編纂所データベースで古記録について「三昧堂」「三昧院」「法華堂」を検索したところ、『貞信公記』（10 世紀前半）の記述をはじめとして、平安時代末までに「三昧堂」16 例、「三昧院」2 例（法華堂との重複を除く）「法華堂」10 例であった。<sup>11</sup>

このうち、比叡山の三昧堂についての記述は以下の 6 例である。(2)については、第二節でも掲出したが、再掲する。

- (1) (K) 根本法花三昧堂送<sub>レ</sub>燈油・供米等<sub>レ</sub>、懺法間料也、北政所送<sub>レ</sub>文  
(『貞信公記』 延長 3 年 6 月 24 日条)

比叡山延暦寺の根本法華三昧堂に、法華懺法（法華三昧行法—『法華經』に基づいて、自己の罪障の懺悔を 21 日間行う）の料として、燈油・供米などを送ったとある（下線部 K）。

(2) 写經始、三寺誦經、(L) 東花・常行・法性寺東堂也、各二十、

(同 10 月 8 日条)

この例は、寛明親王（後の朱雀天皇）の立太子の直前にある記述であることから、その祈願について書かれていると考えられる。誦經を依頼した 3 つの寺の中に、「東花」（下線部 L）、すなわち比叡山東塔の法華三昧堂の名がある。

(3) 興福寺南圓堂申卅人度者、依前例可<sub>レ</sub>給事、(M) 台山東法花三昧堂度者十二人、実性申、御即位間御祈、僧七人申度者、又曰、度者五人給故義海第子、

(同 天曆元年 [947] 閏 7 月 23 日条)

「諸寺度者」のことについて、天皇から『貞信公記』の筆者である藤原忠平に勅使があったという記載である（下線部 M）。

以上、(1) ～ (3) の『貞信公記』（10 世紀前半）の記述は、亡き人を弔うためではない。(1) (2) は祈祷、(3) は度者について勅使があったというものであった。

(4) (N) 今日於天台法華堂修故中納言（藤原懷平）周忌法事、今晚宰相・左中弁等參登、

(『小右記』 寛仁 2 年 [1018] 4 月 15 日条)

これは比叡山の法華堂、つまり三昧堂で周忌法要を行ったという記述である。四十九日ではないが、追善供養が行われている（下線部 N）。

(5) (O) 前帥太娘（式部卿親王宮、）七々法師〔事〕於天台東塔法花三昧堂行<sub>レ</sub>之、米五十石送<sub>レ</sub>之、僧前料、

(『小右記』 長元元年 [1028] 10 月 10 日条)

藤原隆家の娘の四十九日法要が比叡山東塔法華三昧堂で行われたので、贈り物をしたとある（下線部 O）。

(6) 其後召法勝寺都〔維脱カ〕那師教秀賜<sub>レ</sub>馬、(P) 是横川三昧院之被〔法カ〕華堂修理故也、

(『殿曆』 永久 5 年 [1117] 11 月 29 日条)

比叡山の横川の三昧院法華堂の改修の労をねぎらって馬を下賜したと記されている（下線部 P）。

したがって、(4) (5) など史実にも追善供養の例があり、特に (5) は四十九日の例であることから、『篁物語』の「比叡の三昧堂」で四十九日を行うという記述は、史実に忠実な表現であると言える。

#### 四、まとめ

以上、第一部末、篁が、亡くなった異母妹の四十九日法要を行う部分で、本文が「比叡の」、あるいは「比叡の三昧堂」になっている部分に着眼し、『源氏物語』「夕顔」巻の「比叡の法華堂」と同じものをさし、『篁物語新講』の指摘が妥当であることを確認した。その上で、比叡山の三昧堂で追善供養が行われた例が2例あり、そのうち四十九日法要が行われた例も史実に1例あることを明らかにし、「比叡の三昧堂」という表現が史実に忠実であり、「比叡の三昧堂」という本文を採択することが妥当であると結論づけた。

このように、『篁物語』には、本稿で扱ったテーマのように、本文に問題があり、未解決の部分が多く残されている。今後も、一つずつ問題に取り組み、『篁物語』の世界をより明らかにしていく所存である。

#### [注]

1. 成立時期については諸説あるが、筆者は「角筆」「搔練」などの言葉を手がかりに、『篁物語』の成立時期を平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間ではないかと推定している。詳しくは、拙稿「『篁物語』成立年代再考－「角筆」を手がかりとして－（『篁物語』の総合的研究（1））」（『国士館人文学』第7号〔通巻49号〕、2017年3月）、「『篁物語』成立年代再考（2）－「搔練」を手がかりとして－（『篁物語』の総合的研究（2））」（同・第8号〔通巻50号〕2018年3月）を参照。
2. 中村一夫「『篁物語』伝本考―補遺―（『篁物語』の総合的研究（2））」（『篁物語』の総合的研究（2））」（同・第8号〔通巻50号〕2018年3月）などを参照。
3. 『篁物語』の引用は平林文雄・水府明徳会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（和泉書院、2001年）による。その他の仮名作品は『小学館 新編日本古典文学全集』－〈新全集〉と略す－によった。
4. 承空本を見ると、「ヒエノ」と「七日ノ」の間に、1行よりも若干細いスペースがあり、単純な書き落としという可能性もある。
5. 平安時代の仮名作品において、比叡山の三昧堂は、『今昔物語集』に1例見られるが、三昧堂造営の経緯が書かれているのみである。

・今昔、伝教大師比叡山ヲ建立シテ、根本中堂ニ自ラ薬師ノ像ヲ造リ安置奉レリ。  
天台宗ヲ立テ、智者大師ノ跡ヲ弘ル事、思ノ如ク也。其後、弘仁三年ト云フ年ノ

七月二、法華三昧堂ヲ造テ、一乗ヲ令読ル事昼夜二不絶シテ、法螺ヲ令吹テ十二時ヲ繼グ。

(『今昔物語集』 卷第 11・本朝・伝教大師始建比叡山語第二十六 ① 121 頁)

6. 石原昭平・根本敬三・津本信博『篁物語新講』(武蔵野書院、1977 年)
7. 角田文衛・古代学協会・古代学研究所『平安時代史事典』(角川書店、1994 年)
8. 『叡岳要記』(『羣書類從』 第 24 輯[釈家部 卷第 439 頁] 所収) 引用にあたり、他の漢籍の引用箇所と表記を統一したところがある。
9. 用例は、文永元年 3 月 29 日に起きた比叡山延暦寺の火災にさいして、それまでの延暦寺火災の歴史を列挙した記述の中で、康保 3 年の火災について言及したものである。用例中の「今日」は康保 3 年 10 月 28 日のことである。
10. 「東花」とは、比叡山東塔の法華三昧堂のことである。
11. 『御堂関白記』の自筆本・写本などの重複は除く。